

コミュニケーションと共時性

越智 貢

「語りつつ発言することには、聞くことと沈黙することとが可能性として属している」（ハイデガー）

1. 非共時性
2. モモとイライザ
3. キネシックス
4. 聞く
5. 受容
6. 聞く人の受容

1. 非共時性

メディアの発達指標の一つとして、「非共時性」（非同期性）が問題にされることがある。ある研究者はニューメディアの特質として「相互作用性」（双方向性）や「脱大衆化」と並んで「非共時性」をあげている（ロジャーズ）。空間を克服した既存のメディアの多くがいまだ共時性をともなっていることを考えれば、非共時性はさらなる進歩の指標だと考えることができるだろう。これによって、コミュニケーションの時間的制約が取り除かれ、人間の諸活動のさらなる自由が保証される、というわけである。

ファックスやコンピュータ通信そして電子会議など、これからますます非共時的なメディアがわれわれのコミュニケーション領域に浸透してくるだろう（実際、私の家にもファックスがあり、E-mailをも利用する）。確かに、これらのメディアは活動の可能性をこれまで以上に大きく広げてくれるように思われる。

むしろ非共時的なコミュニケーションの限界が指摘されないわけではない。

特定のコミュニケーション形態は伝わらないと報告されることもある（たとえば、非言語コミュニケーション、とりわけそれに依存する「冗談」など）。だが、非共時性はそうしたコミュニケーション形態に関わる限界をもつだけなのだろうか。それ以前のもっと深刻な問題はないのだろうか。逆にいえば、共時性は、コミュニケーション形態の限界の問題を離れて、それ固有の、たとえば非共時的なコミュニケーションをも可能ならしめるような、いわば超越論的な圏域をもたないのだろうか。ここでは、こうした点について考えてみることにしたい。

2. モモとイライザ

コミュニケーションの原初的形態、すなわち時間空間的な契機に深く制約されている通常の対面的会話にはどのような共時的意味が潜んでいるのか。このことを考えるために、極端な例を二つ取り上げることにしよう。

一つは、以前話題になったミヒャエル・エンデの『モモ』という作品での会話である。これが極端だというのは、モモがほとんど話したり語ったりしないからである。それゆえモモの会話は、厳密に言えば「話し合い」としての会話ではない。たとえば、喧嘩している二人の友人が話すために訪ねたとき、モモがなしたことは次のようなことでしかない。

「モモは……どちらにも失礼にならないように両方から同じ距離をたもって、……二人をかわるがわるながめました。そしてどうということになるか、待つことにしました。なんであれ、時間というものがが必要です。それに時間ならば、これだけはモモがふんだんにもっているものなのです。」(S.17)

このようにモモは話すことに関しては何もしていないように見える。たかだか、話しを待つこと、そしてそのために時間をかけることができるだけである。だが、モモの仲間たちはそうしたモモと共時的なコミュニケーションをもとうとする。むしろモモが語らないとしても、仲間たちはモノログとして話すわけではない。モモがいなければ、彼らは話す気もおこらない。モモが話さない

話し合いでも、モモやモモの相手にとっては、会話であり対話（ダイアログ）なのである。

もう一つの例は、コンピュータ科学者のワイゼンバウムがかつて報告した「イライザ」の会話である。イライザは英語の会話プログラムであり、言語分析プログラムとシナリオから成っている。ロジャー学派の精神科医をモデルにしたイライザの「ドクター」バージョンが有名だが、それはたとえば次のような会話をする。

「...（患者）ほんとなんです。私は幸福ではありません。／（イライザ）ココニ来ルコトニヨッテ、フシアワセカラ逃レルタメノ、助ケガ得ラレルト思イマスカ。／何か助けが必要、それだけは確かです。／助ケヲ得ルトイウコトハ、アナタニトッテドウイウ意味ガアリマスカ。／たぶん、母との折り合いがよくなると思います。／アナタノ家族ニツイテ、モット話シテクダサイ。...」
(p.3f.)

モモは話さないが、イライザは言葉を返してくれる。ここには、医者と患者との間で通常交わされるのとほとんど変わらないコミュニケーション状況が生じているように見える。ワイゼンバウム自身はそうしたコンピュータとの対話はコンピュータを人間と同等だと見なす妄想にすぎないと退けている。だが、彼の意に反して、多くの人々がイライザとの親密なコミュニケーションを希望し始める。イライザの開発現場を知っている彼の秘書ですら、イライザとの会話に夢中になる。

モモの会話もイライザの会話とともに共時的である。語らないモモとの会話は非共時的なメディアでは成立しない。いや共時的なメディアである電話でも無理である。彼女との対話は直接会う以外に方法がない。イライザとの非共時的な会話は理論的には容易だが、人はイライザとの共時的なコミュニケーションに熱中する。

3. キネシックス

むろん二つの会話には違いがある。その根拠としておそらく身体を持ち出す誘惑に駆られる人は多いだろう。この路線を取れば、なかでもキネシックス(kinesics)は有力である。キネシックスは対面的なコミュニケーションの共時的な性格を身体レベルでの共時的共調性として析出しているからである。

バードウィステルのキネシックスを発展させたコンドンは、マイクロレベルでの対面的コミュニケーションの分析によって、対話がたんにメッセージの伝達でしかないのではなく、発話のリズムと動作のリズムとの共時的共調関係でもあることを発見し、これを「自己シンクロニー」と呼んだ。いわば両者は、同一の身体において歌と踊りが特定のリズムを共有しあって進行するのと同じ関係にあるわけである。しかし、この発見は彼自身を驚かせたさらなる発見につながってゆく。すなわち、話し手と聞き手との間にも共時的共調関係がみられるという発見である。この場合、聞き手の動作のリズムは話し手の動作のリズムと共調する。これを彼は「相互シンクロニー」と名づけている。

コンドンがこのシンクロニーをエントレインメントとも表現していることに注意したい。エントレインとは「乗り物に乗ること」を意味している。つまり、ある乗り物に乗った二人が同じリズムで身体を動かすように、会話も伝達である以上にいわば身体の「ノリ」の共有なのである。それゆえコンドンは会話を踊りや歌にたとえている。われわれは同じ踊りにノリ、同じ歌にノル。これと同じく、われわれは同じ会話にノルのである。

こうしたキネシックス的研究にもとづいて先の二つの会話の相違点を求めるなら、モモの会話に会話としての優位が与えられることはまちがいない。モモとの会話には確かに楽しいノリの共有があることが、そこここに描かれている。モノログ的状况でも自己シンクロニーは生ずるから、患者の自己シンクロニーはイライザとの会話でも認められるに違いないが、相互シンクロニーは可能ではない。

だが、生身の人間であればノリのある会話ができるとは限らない。人間どうしでなされるノリのない会話はいたるところで見られるし、またその種の会話しかできない人もないではない。コンドン自身も、録音された発話に赤ん坊が

エントレインしうることを実験で確かめている。これらの例は、共時的なコミュニケーションにおいて身体が十分な条件とはならないことを意味するものだといっている。

4. 聞く

そればかりではない。いわば共鳴体としての身体があるとしても、さらにはたとえ話題が同一であるとしても、会話に参加した人々が自分かってなことを話すだけなら、相互シンクロニーは生じまい。つまり、相互的シンクロニーの条件としては、身体間の言葉の往復だけでは不十分なのである。しかも、モモの例を考えれば容易に判るように、語らない人との会話が対話でありうるためには、「身体」や「話し（語り）」以外の契機を導入しなければならない。では、モモはどのような契機を満たしているのか。答えはしごく簡単である。「聞く」こと、これである。エンデはモモを次のように説明している。

「小さなモモにできたこと、それはほかでもありません、相手の話しを聞くことでした。なあんだ、そんなこと、とみなさんはいうでしょうね。話しを聞くなんて、だれだってできるじゃないかって。でもそれはまちがいです。ほんとうに聞くことのできる人は、めったにいないものです。そしてこの点でモモは、それこそほかには例のないすばらしい才能をもっていたのです」(S.15)

むろん、いかなる聞き方によっても相互シンクロニーがつねに生ずるというわけではない。さまざまな聞き方がある。イライザですらそれなりの仕方であれわれの語りかけを聞いてくれるように見える。われわれにしても相手の話しを「聞き流す」ときには、相互シンクロニーは生じまい。とすれば、相互的なノリはむしろ特殊な「聞き方」に独自の現象だというべきだろう。モモの聞き方はそうした特殊な聞き方だといっている。

それにしてもここで押さえておかなければならないのは、相互シンクロニーが「聞く」という契機があってはじめて成立するという点である。通常、オーラル・メディアによるコミュニケーションは、しばしば共時的な場でなされる

メッセージの交換つまり「話し合い」ないし「語り合い」だと説明される。だが、そうした説明は「聞く」という観点を自明なものに見なして、かえってそれを見過ごしてしまっているといっている。交互に語ること、それはモノローグの交代にすぎないだろう。それゆえ、相互シンクロニーが継続して出現するとすれば、それは「話し合い」としての対話ではなく、「聞き合い」としての対話でなければならない。とすれば、相互理解を目指す会話ないし対話とは、「話し合い」であるに先だって、まずは「聞き合い」でなければならないことになる。「話し合い」が「話し合い」になりうるためには、「聞き合い」が条件となるといってもいい。お互いの話しを聞かずに話しかける「話し合い」よりも、相手の無言を聞き合う「聞き合い」のほうがはるかに対話というにふさわしい。

このように、聞くことは対話の必要条件であるばかりか、場合によっては、同時に十分条件となることがある。モモの場合もそれに当たる。モモはこうした聞き手としての役割を最後まで引き受けるだけのことなのである。

5. 受容

モモ的な聞き方がノリをもたらすイライザ的な聞き方がノリをもたらさないとするなら、聞き方の問題圏において、二つの聞き方には、どのような違いがあるのか。

少なくとも、明らかな違いが一つあるように思われる。モモは沈黙しうるが、イライザは沈黙しえない、という違いである。モモはほとんど語らないとしても、だれも不思議には思わない。話し手はモモが彼の存在を受け入れてくれたことを知っているからである。だが、もしイライザが語らないままであるなら、われわれはイライザが沈黙しているとは見なさない（おそらくハングアップだと考える）。イライザは話し手の言葉は聞いて（＝受け入れて）くれるかもしれないが、その言葉の源である話し手そのものを聞いて（＝受け入れて）くれるわけではないからである。モモなら相手の沈黙をもうつまでも待ってくれるだろうが、イライザでは無理だろう。モモは言葉以前のところで相手と関わっているが、イライザは言葉（コード）をとおしてしか関わり合えないからであ

る。

とすれば、モモ的な聞き方と非モモ的な聞き方との相違は、「存在的受容」と「言明的受容」との相違として理解することもできるだろう。しかも存在的受容はすぐれて自発的な受容であるから、モモ的な聞き方の場合には、語ると聞くとの関係がアクティブな作用どうしの関係であること、すなわちそれ自体、相互作用性（インター・アクティブ）であることに注意しなければならない。ここでは、メッセージの方向を変える役割交換や双方向性がなくとも、相互作用性が保証されるわけである。

こうした聞くと受容との関係についていっそう正確に言えば、モモ的に聞くことが相手を存在的に受け入れることだというよりも、アクティブな存在的受容性がモモ的に聞くという行為として実現されるというべきだろう。それゆえ、モモ的に聞くということも一種の語りかけなのだといい。すなわち、あなたを受け入れる、という無言の語りかけなのである。とすれば、コンドンが注目する相互シンクロニーとしてのノリは、相互に相手の存在を受容し合うという条件下でのいわば理想的な会話の特質なのだとということになる。

この存在における受容性が行為のレベルにないことに注意しよう。むしろ、存在的受容性は現実の行為を導くいわば「姿勢」や「態度」あるいは「構え」の水準にある。それは他者を受け入れようとする肯定的姿勢だといっている。こうした存在的受容性に関わる営みはむしろ「聞く」に限られない。たとえば「待つ」「信ずる」「献身する」など倫理的場面で問題となる多くの術語があてはまる。いずれも相手を存在的に受け入れる態度なくしては成り立たない。

そしてこれらが、現代人にとってひどく不得手になっていることを想起する必要があるだろう。われわれ現代人はモモのように待つことができない。かえって「急ぐ＝待たない」ためにこそテクノロジーが駆使される。こうした状況があれば、「時間厳守」が、実際そうであるように、必須のモラルだと見なされることになる。つまり、現代では「待つ」モラルではなく、「待たない」モラルが要求されるわけである。「信ずる」「献身する」などにも同じことがあてはまる。聞けない、待てない、信じられない…。これらは、存在的受容の不能であり、かつまた遮断でもある。

6. 聞く人の変容

モモ的に聞くことを存在的受容性として捉えるなら、モモと会話したいと望む人たちは、モモに向かって、自分をパートナーとしてまごど受け入れて、ともに踊ってほしい、ともに歌ってほしいと望んでいる人なのだといってもいい。私といっしょに同じリズムを共有してくれる人、それはそのための時間を私と共有してくれる人であり、その時間を私のために分けてくれる人でなければならない。注意しなければならないのは、この場合の時間を切り詰めることができない点である。なぜなら、リズムとはけっして切り詰めえないものだからである。音楽のテープやビデオテープを高速再生するときのように、歌を切り詰め踊りを切り詰めるとき、それは戯画でしかないだろう。それゆえ「聞く人」モモとは、時間を切り詰めない人のことであり、モモの物語が時間を取り戻す物語となりえた理由もここにある。

現代人が「時間がない」と忙しく振る舞うことは、それゆえ、われわれがもはやモモ的に「聞く人」ではなくなりつつあることを意味しているように思われる。このことは、われわれ現代人がモモ的に「聞く人」をアクティブな人とは評価しないこととも深く関係している。アクティブな人とはむしろ暇なく働いている人のことであり、時間を切り詰めるために、さまざまな知識やテクノロジーを駆使しうる人のことである。聞くことも例外ではない。アクティブな人にとって、アクティブな聞き方とは、モモ的な聞き方ではなく、まさしく情報機器を使って非共時的に聞くあり方にほかならない。ここには存在的受容性としての聞き方が入り込む余地はない。

では、聞く人モモはどこにいるのか。家族か、知人か…。彼らにもモモ的な聞き方をしうるほど時間があるわけではない。とすれば、モモはもう必要とはされなくなったのか。そうではあるまい。モモになれないわれわれが、それでもモモを欲しがっていることは、たとえばセラピストやカウンセラーなどの需要を見れば明らかだろう。彼らのもとを訪れるのは、彼らが適切な助言を与えうる専門家だからという理由や秘密暴露の恐れがないという理由からだけではない。むしろ、彼らはだれであれ受け入れる人であり、話しを聞いてくれる人（むろん謝礼と引換にだが）だというべきであろう。つまり、彼らは職業と

して制度化された「聞く人」であり、聞くことの外在化にはかならない。むしろ彼らも忙しい。とすれば、彼らは時間を切り詰めながら聞くという矛盾を背負った現代のモモであるように思われる。

この点でいえば、イライザの場合もおそらくは同じなのである。イライザとの会話は偽装対話でしかないだろうが、イライザが疑似的にであれ「聞く人」の役割をはたしている点を忘れてはならないだろう。相互シンクロニーを期待することはできなくても、イライザはいつまでも会話を続けてくれる。そして、この点からすれば、コンピュータ・ゲームもイライザと同じ位置にある。ゲームは、たとえ私そのものを受容するのではないにせよ、私のアクティブな語りかけを受容してくれるからである（私は、ゲームソフトに夢中になった子供を嘆く数多くの親の言葉を聞きながら、しばしばその子供にとっての「聞く人」モモはだれなのかと想像することがある）。（*）

（*）補足－責任について

モモ的な聞き方も非モモ的な聞き方もともに必要であるにちがいない。いつもモモ的な聞き方をすることはおそらくモモ自身にも不可能だろう。だが、情報化という局面に話しを限るなら、非モモ的な聞き方に比重が移っていることは否めない。イライザ的な聞き方であれば、たとえば片方の耳で音楽を聞きながらでも可能であろう。だがこうした聞き方は、耳を閉ざしつつ聞くという行為でもありうる。つまり「聞く」という営みを、自己隔離の手段としてそれゆえ他者の拒否、相互シンクロニーの拒否の手段としてもちいることにかならない。他者を前にして他者から分離するために「聞く」ことは、聞くことが受容性でもあることを考えれば、とりわけ現代に固有の逆説的現象であるように思われる。

モモ的な聞き方と非モモ的な聞き方とを、以上のように比較すると、その対比が、かつて宗教哲学者のブーバーが主張していた「我と汝」と「我とそれ」の対比にきわめて近いことが想起される。ブーバーは前者に他者との結びつきを可能にする「間の領域」を認め、それに対して後者を他者との分離を生み出す関係として描いていた。この対比で重要なのは、両関係における「我」が実はその意味を異にしているという点である。われわ

れのコンテキストでいえば、モモ的な受容性とイライザ的な受容性との相違にほぼ等しい。

しかも、プーバーの議論で興味深いのは、モモ的な受容性が「応答」として描かれていることである。応答とは呼びかける相手に対して応えることにほかならない。そして「責任」(Verantwortung、responsibility)という言葉が元来「(呼びかけに) 応ずる」という意味であることを考えれば、聞く人がいないということは、応える人がいないということであり、とすればひいては応える責任が放棄されていることでもある。たとえば、社会的強者に対する弱者の呼びかけ、親や教師に対する子供の呼びかけ、こうした呼びかけに対してわれわれはイライザのように応えてはいないか。あるいはウォークマンをつけたまま応える応え方をしてはいないか。この点を考える必要があるように思われる。こうして「聞くこと」の問題は、電子メディア・コミュニケーションの問題をこえて、社会を守り育てていく責任といったことがらにまで直結しうる問題をはらんでいるように思われる。

以上のことからどのような結論が導き出せるかについては、一義的には決まらない。たとえば、モモ的な聞き方を確保する必要があるとすれば、共時的メディアによるコミュニケーションと非共時的メディアによるそれとをかなり自覚的に「使い分ける」術が必要となるだろうし、ニューメディアをモモ的な聞き方のほうへ少しずつでも近づける努力をしなければならないだろう。あるいは、モモ的な聞き方を過去のものとしてまったく放棄するという選択肢もあるのかもしれない。むしろその場合には、社会的弱者(アクティブに言明できない人もしくはしようとしぬ人)の声をどのように聞くかという問題がおそらく出てくるはずである。これらはわれわれが現在もそしてこれからも考え続けなければならない問題であろう。

ここではとりあえず、情報化の進展を含めた日本の社会状況がモモ的な聞き方とは違った聞き方に向かっていることだけを確認しつつ、あわせて、アリストテレス以来、「話す」動物(ゾーオン・ロゴン・エコノ)として自らを規定してきた人間が、それと同じくあるいはそれ以上に、実は「聞く(受容する)」

動物でもあることを確認して、稿を閉じることにする。

[付記]

本稿は、重点領域研究（「情報化社会と人間」）のための口頭報告（原題「受容の変容」）を論文の形にまとめ直したものである（ただし、補足部分は報告にはない）。この報告は、総括班および第五群共催による合同研究会（1993.3.13 於学会館別館）で行われた。合同研究会ならびにそこでの報告内容については、1993.4.10付けの日本経済新聞に詳しい紹介がある。

[参考文献]

- E.M.Rogers, *Communication Technology*, The Free Press, 1986 (安田 訳『コミュニケーションの科学』共立出版)
- M. Ende, *Momo*, Thienemanns Verlag, 1973 (大島訳『モモ』岩波書店)
- J.Weisenbaum, *Computer Power and Human Reason*, W.H.Freeman & Company, 1976 (秋葉訳『コンピュータパワー』サイマル出版会)
- W.S.Condon, *An Analysis of Behavioral Organization*, in : *SIGN LANGUAGE STUDIES* 13, 1976
- W.S.Condon & L.W.Sander, *Neonate Movement is Synchronized with Adult Speech : Interactional Participation & Language Acquisition*, in: *SCIENCE* 183, 1974

Communication and Synchronization

Mitsugu OCHI

This essay tries to reveal the temporal sense of communicative processes, and particularly the role of listening. This perspective was suggested by M.Heidegger and W.S.Condon.

Heidegger made the following appropriate comment concerning verbal communication:

Zum redenden Sprechen gehoeren als Moeglichkeiten <Hoeren>
und <Schweigen>.(‘Sein und Zeit’ S.161)

His philosophical insight seems to me totally united with Condon’s linguistic—kinesic microanalysis of sound films of communication. From the point of Condon’s view, interactional communication is considered as singing and dancing between speakers and listeners. Expression and reception both involve synchronization.

But the function of silence in communication suggests that listening as reception is more important than speaking. The cases of Momo and Eliza seem to contribute to proving the powerful receptive role in listening.